

中国石郵村の追儺行事に登場する鬼と翁の身体技法に関する調査

廣 田 律 子

HIROTA Ritsuko

このチームは、中国で行われる追儺行事に上演される演目の中でも、鬼神や翁の動きに注目し、除災招福の身体表現について研究をすすめている。今後モーションキャプチャーを使う等して演技の数値化を試み、動きの特徴をつかむことで、除災招福を目的とする演技について日本はもとより種々な民族間での比較を試みる可能性を探ることを目的としている。さらに記録し、動きを解析することは今後の伝承者を育成し、演技を後に伝える上でも重要な役割を果たすことと考えている。1年目の今回の調査では中国の鬼と翁の演技の代表格とされ、今後モーションキャプチャーによる数値化を考えている石郵村の事例を調査した。

2004年1月22日から27日にかけて調査を行ったが、日程は、22日に成田から上海を経由し江西省の南昌に到り、23日に南豊県県城に入り、午後から石郵村の調査を開始し、24日、25日と石郵村で追儺行事と演技の調査を続けた。26日に南昌に戻り27日に南昌から上海を経由し成田に戻った。参加者は、神奈川大学外国語学研究科教授 山口建治、株式会社わらび座 デジタルアートファクトリー 長瀬一男、高知県立歴史民俗資料館主任学芸員 梅野光興、神奈川大学経営学部教授 廣田律子の4名である。

22日は旧正月1日にあたり、旧正月の2日目にあたる23日夜には、仮面は15番目の家に泊まるのだが、その際行われる下馬の儀礼を見る事が出来た。旧正月3日目にあたる24日と4日目の25日には8人の演者が順路に従って家々を回り、8演目が上演されるのを確認できたが、分家して新築した家も加わり以前の調査で確認したよりも村全体で十数件増加しているようだった。⁽¹⁾24日の夜は廟での下馬の儀礼を見る事ができた。

とにかく1979年に復活されて以降、毎年毎年変わらずに、1軒1軒を回る非常に丁寧な除災招福の祭りが行われ続けている。人々は年のはじめに新しい年の順調な生活を神に願う。仮面の神々が直接人の前に姿を現して、祝福を与え、また順調な生活を脅かそうとするものを祓い清めてくれるのだと信じられている。こうした信仰的なしっかりした背景がある上に祭りの維持組織の頭人会が存在し、8名の演者の質が保たれている点が、種々な社会的な変化にもかかわらずこの祭りが伝承されている理由であろう。

今回は今までにない視点から演者と囃しと観衆がどのように演技の動きを受け止めリズムを体感しているのか、総合して考えていこうと試みた。ここに伝承の鍵が隠されていると考えるからである。今回仮面の演技、特徴的な動きに研究の焦点を置いたため、数件の家で複数の角度からビデオ撮影を行った。今後更に時計回り反時計回りの回転、足踏み、跳びはね、側転等の動作の分析、手印の分析、及びリズムとの関係の分析が必要と考える。その記述の方法としても数値化はあらためて有効で

あると感じている。

長瀬氏からは、子供達が手振り身振りで演者の動きをまねている点について、子供は演技の特徴的な部分をつかんでおり、自然にリズムを体感して動けるのだという指摘があった。また子供がまねたがる演技は伝承されていく力が強いという指摘もあった。また家の構造からも新築された家の場合でも、演技の場を保って建てられている点は伝承されていく上で必須のものとの指摘があった。

梅野氏からは高知県の物部村の例から演者の手印を結ぶ動作との比較が可能ではとの指摘があった。手印のもつ意味については考察の余地がある。

10年以上にわたり調査を続けてきたが、今回子供達が積極的に祭りに関わり始めたと感じた。演技をまねして動くことはもちろんだが、とりものを運ぶのを先を争って手伝っている姿は、かつては見られないことであった。今後の伝承に大きな影響があるに違いない。

また2003年に不幸にも仮面が盗まれたが、今回村人特に女性たちの強い希望で仮面が7千元かけて南豊都城の黄志明により新たに製作された。7千元の内2千元は人民政府が補助し、残りは村の各戸から数十元ずつ出し合ったという。面に魂を入れる開光儀礼は旧12月21日に行われた。この経緯からも村人の祭りへの深い思いが伝わってくる。

以下に過去の調査で得た資料をベースに、石郵村の追儺行事及仮面の演技について略述する。

行事の主催者と演者

江西省の漢族の村々には、儺神を祀る廟があり、廟を中心とし旧正月に、除災を意図する追儺行事が盛んに行われ、村々によってそれぞれ異なる演目で仮面劇が上演される。今回2004年1月22日から27日に調査を実施した江西省南西部に位置する南豊県石郵村の追儺行事は、方相氏以来の古い形の儺の祭りを保っている貴重な例で、記録では明代に始められたとされる。

石郵村は、呉姓を大姓とする漢族の村である。追儺行事は、村の有力な氏族である呉氏一族の繁栄が約束されることを意図して村全体で行われる祭りである。この行事を維持管理する組織として、呉姓の人々で構成された「頭人会」がある。文革中追儺行事は行われなかったが、1979年から復活して行われるようになった。この時、本来呉姓24家で構成されていた「頭人会」は、村長などの幹部を加えて32人で組織されるようになった。頭人会の具体的な仕事の内容は、追儺行事や面の補修などの祭りに必要な資金集め、用品の準備、儺神を祀る廟とその所有物の管理、儺班の構成員の任命・罷免、追儺行事の実行運営が挙げられる。

また実際の祭りの司祭、演技を担当する、基本的に石郵村の呉姓以外の雑姓の者八名から構成される「儺班」がある。儺班は、男性8人と決められていて、加入した順に大伯、二伯、三伯……八伯と称される。儺班には食事の作法や席順等様々な厳しい決まりがあり、祭りでの役割もはっきりと分担されている。演技や唱えごとは、先輩から後輩へ口頭で教えられ、農閑期などに練習を行う。

その他、廟内の大ロウソクを準備する「ロウソク会」、爆竹を準備する「爆竹会」、打ち上げ花火を準備する「炮会」、竹の松明を用意する「灯会」と称して行事に協力する人々がいる。

祭りの中心となる儺神廟は、村の南西に位置し、1985年に火災にあったが、人々の2万元に達する寄進により修復された。廟の正面には儺神太子の高さ1メートル程の神像が座し、その後に「儺

仔」と称される持ち運びのできる儺神人形の座を中心に、上段に雷公、鍾馗、儺婆、儺公、関公、開山、下段に小鬼、紙銭、哪吒（一郎）、楊戩（二郎）、大鬼、大鬼そして近年加えられた如来の30センチ程の像が置かれている。また儺神太子に向かって右手に土地神の像、左手にこの村で追儺を始めた呉太尹公の像が祀られている。

祭りの進行——「起儺」

祭りは、「起儺」、「跳儺」、「搜儺」、「圓儺」の四つの段階を経て進められる。祭りの構成については、仮面劇の上演前後に必ず祭祀儀礼が行われる。上演自体も、2段に分けることができる。前段では面の神々は家を訪れ祝福を行い、後段では神々によって家々から見えない邪霊が駆逐され、除災が行われる。新年の開始にあたり、神々が出現し招福と辟邪が2部構成で執り行われる。

「起儺」では、旧暦正月1日（2004年は1月22日）の前日と当日に祭の場に神々を呼び出す祭祀が行われる。晦日に儺班達は儺神廟に参拝し、儺神太子とその左右の呉太尹公と土地神に線香を点す。廟の扉外には爆竹を掛けて鳴らし、紙銭を燃やす。廟の扉を閉じて儺班の他は一人たりとも入れない。廟の祭壇正面の天井裏にある竹箱から面を取り出し、道具類も下ろす。

箱から出された面は、茶の葉を湿らせたもので拭いた後、祭壇正面の上部に掛ける。順番は上段左から、雷公、鍾馗、儺婆、儺公、関公、開山、開山と並べ、下段は左から小鬼、紙銭、哪吒、楊戩、大鬼、大鬼と並べる。開山面と大鬼面が2面ずつあるのは、廟の守りとする開山面と面を入れる箱の守りとする大鬼面があるからだ。儺神太子の化身である儺仔の人形は衣を替えた後、儺神太子の後ろに並べられたそれぞれの神像の中央に椅子を置いて座らせる。

1日は、まず神まぎを行う。儺班は3列になり、胸のところで手を組み3回拝礼をする。「儺神太子鳴詞」が唱えられる。唱えごとは、神々の名を並べ、無病息災、五穀豊穰、商売繁盛、学業増進等の人々の願いを伝える内容である。以前は現在二伯の羅会武によって唱えられていたが、今は四伯の葉根明によって唱えられている。

次に対になっている卜具を使って、神の意志を尋ねる。この時の唱え事の内容は、当日、神をお連れする場所を述べ、人々はきっと歓迎しますからどうぞ出発しましょうというものだ。ここで神が同意した場合、卜具の陰と陽つまり凹面と凸面が揃う。しかし、凹面のみ、または凸面のみ出た場合は「今朝はまだ遅くありませんから、どうぞお願いします」と唱えて、また占いをする。陰陽が出たら「神が馬に乗られる」つまり出発ということになる。

はじめに村の東西南北に祭られる福主殿・牛大王殿・師善堂・桐樹殿等の各廟と東と西の宗廟そして村内を区切る門に参拝する。六伯、七伯は線香、ロウソクを持ち、先にそれぞれの廟に点す。掛けてあった面は、廟の守りとして開山面1面を残して、すべて箱に収める。大伯は太鼓、二伯はドラ、三伯は儺仔、八伯は面の入った箱を持ち、四伯と五伯は何も持たずに参拝に出る。

祭りの進行——「跳儺」

「跳儺」は、奉納の劇を演じることで、1日から16日午後まで行われる。1日から9日までは石郵

村で、10日から16日までは他村で行う。演目は『開山』、『紙銭』、『雷公』、『儺公儺婆』、『醉酒・酒壺仔』、『跳橈』、『隻伯郎』、『関公祭刀』が演じられる。それぞれの演目は、神々が現われ、はっきりしたストーリーはなく、単純な動作で構成されている舞踊である。

開山 開山神の仮面をつけ、手に斧を持って前後左右に跳ね回る。特徴的な動きとして、時計と逆に順に回転し、片足また両足で跳び、足を踏む等がある。親指、中指、薬指をつけた手印を結びぱっと開く。最初に家を訪れ、その場の悪疫を退散させる役柄である。開山面は搜儺にも登場するが、地は黒。金色の目の黒目が半円にくりぬかれ、黄金の大きな鼻と火炎の眉、赤い口に2本の牙、額に丸い鏡を付け、頭に2本の角を生やした恐ろしい風貌をしている。

紙銭 赤い糸の両端に紙の銭を赤布に包んでつけたものをもって舞うので、この名がある。特徴的な動きとして、腕を組み天を仰ぎ、地を俯瞰する所作、左右の足を踏む動作、側転する動作を行う。親指、中指、薬指をつけた手印を結びぱっと開く。殷の紂王の息子の殷元帥とする説もあるようだが、この神の素性ははっきりしない。紙銭面は、地は茶。黄金の目の黒目と目の縁がくりぬかれ、大きな鼻と火炎の眉、口には牙を生やし、耳は大きく、頭に2本の白い角を生やしている。

雷公 手に鑿をもち跳ね回り、雷神が悪鬼を退散させることを表すという。特徴的な動きとして時計と逆に回り、時計と順回りに旋回を行い、手を上から下へ振り下ろす。もちろん雨を司る神の登場は、農耕の順調なことを予祝する意味も加味されているにちがいない。雷公面は、地は緑。金色の目の黒目と目の縁がくりぬかれ、大きな鼻と金色の火炎の眉、額に第3の目の黒目がくりぬかれ、縦に金色の線が入れている。口は鳥の嘴のように尖り、耳は大きく尖り、頭に2本の白い角を生やしている。



雷公

儺公儺婆 特に情緒溢れる演目で、柔和な爺と媼の仮面をつけ、杖と扇子をもつ。太鼓とドラに合わせ、ゆっくりとした動きで、祭壇から下ろした儺仔を抱き、子を褒める仕種やおしっこをさせる所作等わかりやすい動きをする。特徴的な動きには片足を上げ、扇を下から上にあおぐ等がある。また、老人達は、接吻したり、爺が媼の髪をとかしたりなどする。このように子育てを表現して子授かりを暗示したり、人々がこうあれかしと欲することを展開してみせる役柄である。老体の神の風貌は、祖先を彷彿とさせるが、やはり種々の恩恵を与えてくれる存在として考えられている。



儺公と儺母

儺公の面は、地は白。ほっそりとした黒目がくりぬかれ、口は笑ったように右上りに開け、歯が見

える。口の回りには白い鬚が埋め込まれている。額にはしわが彫り込まれ、柔和な風貌をしている。雛婆の面は、地は白。微笑んだ目は山形にほっそりと黒い目がくりぬかれ、口は笑ったように右上りに彫られ、両脇に穴が開いている。眉毛は細く、優しい表情をしている。

醉酒・酒壺仔 鍾馗と大鬼、小鬼によって、酒が汲み交わされ、酔っ払い、戯れ合う情景とされる。足踏みや跳ねや回転から3者の動きは追儼を意図したものと考えられる。手印には、親指、中指、人差し指をつけるもの、人差し指のみ立てるもの、親指のみ閉じるもの、手の裏を見せるものがある。この間、大鬼は周囲で見ている子供達に酒を与えようとするが、この酒を口にすると無病息災であるという。

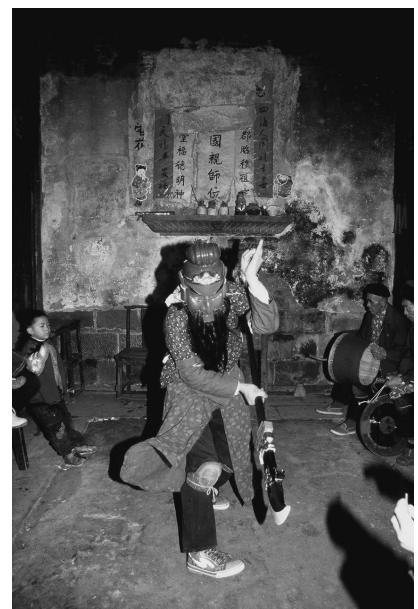
大鬼面は、地は青。金色の目の黒目がくりぬかれ、金色の大きな鼻と火炎の眉、赤い口に2本の牙、額に人面のついた金輪をはめ、頭に2本の角を生やした、日本の鬼にも通ずる風貌である。小鬼の面は、大鬼と同様といえるが、ただ小鬼には火炎の眉と眉の間に金色の丸が施されていない点で異なる。鍾馗面は、地は黒。金色の目の黒目が半円にくりぬかれ、金色の大きな鼻と逆八の字の眉、きゅっと結んだ赤い口、怖い官吏の風貌をしている。

跳撓 椅子を挟んで鍾馗と小鬼の戯れが演じられる。やはり酒をのむ情景とされるが、足踏みや回転の動き、剣を振るう動作からは追儼が意図される動きといえる。

雙伯郎 雙伯郎は、一郎が哪吒で、二郎楊戩であるとされている。二人大刀を振るって勇ましく対戦する。親指、中指、薬指をつける手印が結ばれる。特徴的な動きとして、腰に手を当て膝を曲げる、片足で跳ぶがある。哪吒も楊戩も、明代に創作された『封神演義』に活躍する人物だが、創作上であれ、人気のある人物はあたかも実在したかのように信仰の対象として神々の列に加えられている。哪吒・楊戩の面は、2面とも地は白。金色の目の黒目が小さく丸くくりぬかれ、赤い口はきりりと結んでいる。眉はまっすぐにきりりと黒く描かれている。ただ楊戩には額に縦目が施されている点で異なる。

関公祭刀 武勇を誇る関羽が、大刀を振りかざして武芸を披露する。特徴ある動きとして、片足で跳ぶ、反時計回りと時計回りの回転がある。親指、中指、薬指をつける手印を結び、ぱっと広げる。武将として名高い関羽だが、志半ばで無念の死を遂げたため、人々から哀れまれ、恐れられ、祀られるようになった、武芸によって人々を守護する武神である。関羽の面は、地は赤。黒目が小さくくりぬかれ、きりりとした尖った黒い眉、大きな鼻、口と顎には黒い鬚が埋め込まれ、頭には冠をつけている。

1日には、西の宗廟とその門前にある長寿を全うした死者の棺桶を置くための花びら型に床が彫り込まれた「花寝」と称される場所で上演された後、東の宗廟とその前の「花寝」で上演され、続いて石郵村で儼の祭りを始めたとされる呉太尹公の家で上演される。この家も今は、太尹公直系の後継は絶えてしまい、曹家と呉家の2家が住む。1日に上演されるのは以上の5箇所に限られる。



関羽

2日から9日まで石郵村の各家々で順番に上演される。毎日上演前に儺班達は儺神廟で拝み、神の意志を占う。

家々では入口正面奥の庁堂にある神棚の前に祭壇をしつらえ、ロウソクを立て、菓子などの供物を供え、線香を用意し、赤い紙にお礼として2元から4元を包む。

家の主人は3本線香を点し、儺仔を迎え、家の祭壇中央に置き、ロウソクを点す。家の人々は3本ずつ線香を持ち、戸口で儺班を迎える。儺班達は、戸口のところで16句の祝詞を唱え、その四句ごとに主人は爆竹を鳴らし、人々は「良いです」と答える。その後家に入り、祭壇前で八つの演目の中から演じる。家によって演目が違うが、はじめの『開山』は清めの意味があるので、必ず演じられる。武器などのとりものを振り上げる激しい動きが多いが、上演中は決してとりものを落としてはならないとされている。

上演後、主人は菓子和線香、紙銭、礼金を大伯に贈る。大伯は菓子は半分受け取るが、残りを返す。この時、大伯は「人が栄え、財を成すように」と祝言を述べる。主人は「神様のお陰です」と答える。

1日ごとに上演後、儺神廟に戻り、「馬から降りる（下馬）」と称して、神降ろしを行う。その際、「どどこに行き、人々は喜んで迎えていました。どうぞ馬から下りてください」と唱える。箱を守る大鬼の面一つを残し、全ての面を取り出し、祭壇上部に掛ける。七伯は、とりものなどの道具を翌日の上演1番目の家に持って行っておく。

2日目と8日目は、慣習に従い儺神廟に戻らず、個人の家で下馬を行う。祭壇に面を並べ、供物として鶏、魚、豚を供える。その晩、主人をはじめ家の人々は「神に付き添う」と言って、明かりをつけ、麻雀などをして夜を明かす。

毎日、下馬を終えると、儺班は供物や礼金の分配を行う。1日から16日に得た供物の菓子と1日から9日の石郵村で得た礼金は8人で分配する。10日から16日に他村で得た礼金は儺神廟に百元。頭人へのもてなしとして百元、そして儺班の慰労会のために支出するため四伯が保管する。1993年では、1人約165元ほどの収入を得た（当時1元＝約20円）。

10日から16日はほかの村に赴き上演する。

祭りの進行——「搜儺」

「搜儺」は、16日夜から翌未明まで夜通しで行われる鬼やらいの儀礼である。これに先立つ15日夜、予行練習をして、頭人などの厳しいチェックを受ける。最初にロウソクを点ける。「儺神廟太子鳴詞」を唱え、搜儺を行う順路を唱え、最後に「皆が神様を喜んで待ってます。馬に乗ってください。」と結ぶ。祭壇に置かれていた酒壺を取り、大伯、二伯……八伯と次々に椀に注ぎ、一口ずつ飲む。神にも捧げる。それぞれ祝言の文句を言い、鍾馗、開山、大鬼の3面を取り、酒を吹き付けて、それぞれ四伯、五伯、七伯が被る。辟邪を行うのは、特に呪眼が強調された、恐ろしい形相をした神々が主となる。恐ろしい風貌であることで見えない邪をなすものを驚かせ、屈服させることができると考えられている。

そして、まず廟の鬼やらいを行う。打ち上げ花火が物凄い音をたてる。止めどなく爆竹が轟く。廟



鬼と鍾馗

の門口に鍾馗が現われ、3回飛び跳ねたかと思うと、物凄い勢いで廟内に駆け込んで来る。そして祭壇左手前に立ち、右手の親指、中指、薬指をつけて印を結び、精一杯門口に向かって振る。次に開山が現われ、やはり3回跳び、走り込んで来る。手には鎖を持ち、その一方の端を鍾馗に持たせ、祭壇右側に立ち、やはり印を結んだ右手を門口に向かって精一杯振る。続いて大鬼が3回門口で跳んだ後走り込んで、鎖を飛び越え、祭壇前で右手、左手と挙げ、上に下に頭を動かして、側転をする。最後に3神は祝言を述べた後、外に走り出る。

竹を乾かして作った3メートル程の松明を持つ人を先頭に、各廟と東西の宗廟はもちろんのこと、村にある123軒、1軒1軒の祭壇を回って、鬼やらいを行う。

家々では、ドンドンという太鼓とピューという口笛、そして打ち上げ花火の音で、鬼やらいが我が家に近づくのを感じ取る。祭壇にロウソクが点され、供物として炊いたご飯を碗にてんこ盛りにし、その上に小魚の焼いたもの、豚肉の煮たものが重ねられ、赤い紙を載せる。紙銭と線香を置き、また湯飲みに水を入れておく。

松明を先頭に、お札の紙銭と線香を受け取る人、供物の食品を入れる桶を担いだ人が3人、そして太鼓とドラと3神、また打ち上げ花火を上げる人など十数人が続いてやって来る。主人や家人は皆で線香を点し、爆竹を鳴らして門まで迎えに出る。打ち上げ花火が3回鳴らされる。紙銭を受け取る人と桶を持つ人が家の中に入る。太鼓やドラを打つ難班が門口に立ち、この家が祝福されるように祝言を述べる。家人は「これも難神のお陰です。」と答える。太鼓とドラが家に入り、祭壇の脇に並ぶ。ドンドン、ジャンジャン、そしてピューという口笛。難神廟と同じように鍾馗、開山、大鬼が現われ、鬼やらいが行われる。最後に3神がそれぞれ「人が栄え、財を成すように」「家々に吉慶、戸々に安全」「男に百の福、女に千の吉祥」などと、祝言を述べる。家人は「難神のお陰です」と答える。普通の家はここまでで終わりとなるが、村の中で5軒の家だけは、家中の部屋という部屋全部の鬼やらいが行われる。これを「搜間」と称す。

祭壇前での鬼やらいが済むと、開山と大鬼が松明を先頭に、家の祭壇に向かって右手の部屋から一部屋ずつ回って、左手の部屋から出てくる。部屋の入口に鎖を打ち付け、右足を出し、左足にそれをつけるようにする足運びで、やや上体をかがめ、時々足を踏み、部屋の中の悪いものを脅かし、追い出そうとする。再び悪いものが侵入しないように鬼やらいの済んだ戸を固く閉める。鍾馗は印を結んだ手を揺すり続ける。太鼓はゆっくりドンドンと打ち鳴らされる。最後に祭壇の部屋に戻り、仮面を上げ、顔を出し、楽隊とともに、この家の平安や五穀豊饒などを祈る祝言を大声で唱えてから、門口を出て、次の家へと回る。主人は爆竹を鳴らして送り、この時初めて部屋の戸を開けても良いことになっている。

清代の文献『石郵郷難記』から推察すると、全戸でこのような搜間が行われていたようだが、時を経て戸数が増し、特別ないきさつを持つ五軒のみで行われるだけとなった。搜間をする家に加えられ

るには、頭人の許可はもちろん神の意志を尋ねなくてはならないという。

捜儺の間、休憩のために餛飩の入った饅頭やら白湯を出す家も決められている。そのような時、鍾馗の面は祭壇に向かって右手の柱に、開山、大鬼の面は左の柱に掛けられている。儺班と手伝いの人々は決められた卓につき、饅頭などを食べるが、必ず盆の四隅に1個ずつ残さなくてはならない。

家々では子供も大人も夜を徹して寝ずに、3神の訪れを待つ。16日の月明かりが東から西へと傾く午前3時まで祭りは止まらない。

祭りの進行——「圓儺」

「圓儺」は、全村を回り終わり、儺班が凄い勢いで儺神廟に駆け戻ってから始まる。災いを村外に追い出し、神々を送る儀礼である。神に礼拝して、儺班のために1日から16日まで食事を供した家の戸主の名を読み上げ、一人一人の運勢を占う。占いに陰陽の卦が出ると、神に真心が通じたとされる。

廟に置いてあった儺仔の人形と全ての面を下ろし、箱に詰め、村の南側を流れる川の河原に向かう。この儀礼に女が参加する事は固く禁じられている。松明も灯さず、月明かりだけを頼りに真っ暗闇の中、風水先生に見てもらっておいた方位に、まず儺仔を置き、その左右に儺公、儺婆の面と杖を配し、それを中心に八卦の形のようにそれぞれの面ととりものを置く。そして、松明を持った大伯の後に7人が続き、面の周りをぐるぐる回る。

松明を消して、素早く儺仔と全ての面を箱に収める。太鼓を裏返しにして、その中で今年の穀物の出来具合、家畜の育ち具合、子供の授かり具合、病気の治り具合を占う。この時、「一粒の米から万粒採れる」「家畜は増える」「子を求める者には、子宝が授かりますように」「麻疹の女神様、病気がすぐに治りますように」と唱えて占う。1993年の場合、陰陽と出るまで、穀物と子授かりと病気は2回占い、家畜は3回占った結果、大伯が「今年は穀物と子授かり、病気の状況は良と出た。家畜は不良と出た」と言った。家々からお礼として集めた紙銭と線香を燃やす。

廟に戻ると門が閉ざされており、内の人物と問答を交わした後門が開く。儺神に拝礼をし、面の箱を下ろす。

七、八伯が家々から集めた供物から一杯のご飯と一切の肉、一尾の魚そして豚の血を桶に入れる。廟の南西の方向に持っていき、紙銭を燃やし、空に向かって桶の中の供物を撒き、歴代の儺班の霊に捧げる。この際、歴代の儺班達の名を呼ぶ。紙銭を燃やし、3回拝礼をして儺神廟に戻る。

家々から頂いたご飯と肉と魚で、儺班の8人のほか、祭に協力した人々で直会を行う。これを「儺飯を食べる」と称し、共食することでさらに団結感を強めることになる。

朝10時ごろ、儺班が頭人たちを招いて、供物でお礼のご馳走をする。ここで今年の儺班について頭人たちの批評が加えられる。また、残った供物は、村内の食事を提供してくれた家々に少しずつ返す。これを「回飯」と称す。四伯は菓子の桶を持ち、五伯は肉の桶、六伯はご飯の桶を持ち、八伯が家々に一椀のご飯と二かけの肉を返して回る。家々では、「神のご飯を食べれば、頭が万丈にも高くなります」と答え、また菓子などを返す。他村には18日に七、八伯が赴き、お返しをする。1人は上路、1人は下路を受け持つ。

祭の最後として面などの片付けがされる。これは風水先生に選んでもらった日に行われ、旧正月の20日前後に当たる。儺神廟で儺班たちは拝礼を行った後、面を良く拭いて乾かす。使った用具も洗って乾かす。線香とロウソクを点し、廟門を閉じ、神像の上の屋根裏の大きな竹製の箱に面をしまう。下の段に2面の開山、儺公、儺婆を置き、紙を挟みながら、その上に哪吒、楊戩、紙銭を重ね、そのまた上に2面の大鬼、小鬼、鍾馗を載せる。最後に儺仔と小道具を入れ、蓋を閉める。その後、廟門を開ける。これで祭りの全てが終了する。

注

- (1) 廣田律子『鬼の来た道』玉川大学出版部 1997年 p.66-67

(事業推進担当者)